

フィールドワーク教育におけるマルチメディアの活用と教材開発 ～印刷教材と CD-ROM を併用するメディアミックス型教材の事例をもとに～

山中速人（関西学院大学）・若林良和（愛媛大学）

A 研究の目的

フィールドワークはたんに社会調査の一種というだけでなく、その実践は、社会学、文化人類学をはじめ隣接諸科学を学ぼうとする学徒や研究者にとって、きわめて重要な位置づけを持ってきた。

しかし、一方、フィールドワークは、それが実践される場と社会的条件をめぐって今日的な諸問題を投げかけ、とくに調査する側とされる側の間に横たわる非対称的な関係に示されるように、フィールドワークという学問的实践それ自体がポスト近代における学問と社会の問題を考える重要な糸口をわれわれに示している。もはや研究者はフィールドワークを研究者の聖域とすることはできないし、そこで得た知見をたんに同業者としての安全な研究者集団の中にもみ独占しておくことはできない。

このような問題意識を前提として、フィールドワークを通して社会学や人類学は何を学んできたか、そして、何を学ぶのか、さらにどう学びつつあるのかをフィールドワークを実践する社会学者・文化人類学者および

近接領域の研究者の論理・実践・技法から考えるのがこの教材開発のめざすものであった。

開発する教材は、印刷教材とマルチメディア(CD-ROM)のメディアミックス型教材の形態を想定した。

対象とする分野については、とくに社会学におけるフィールドワーク教育の内容に沿ったものとして制作がすすめられたが、それだけではなく、文化人類学など隣接諸学に共通するフィールドへの接近とその論理・技法・実践を取り上げ、フィールドワークをめぐる知識や技法を学習者と共有し、ともに考えるような内容にすることをめざした。

B 達成課題と開発教材のイメージと条件

この研究の中心は、実際的な入門書を開発することであり、具体的には、従来の印刷教科書に加えて CD-ROM を媒体とするマルチメディア形式の補助教材を並行して開発することにあつた。これは、印刷テキストのもつ上述したような限界をマルチメディア形式の教材を併用することにどの程度克服することができるかに実際の

な見通しを得ることであつた。したがって、これはフィールドワーク教育を全面的にマルチメディアによって行おうというものではなく、あくまで実際的な教育場面を想定して、印刷テキストと共存できるマルチメディア教材を開発することに主眼があつた。そこで、開発すべき具体的教材の形態のイメージとして、次のようなイメージを想定した。

まず、印刷テキストと CD-ROM を媒体するマルチメディア教材を効果的に組み合わせ、インタ



ーネットや映像文化に高い親和性をもつ今日の学生たちの知的指向性に合わせた教育手法を模索する。そのために、以下の3つの条件を用意した。

a 印刷テキストは、できるだけ軽量化する。(既存のテキストの3分の2以下の厚み)

b マルチメディア教材は、学生が講義をよりよく理解するための補助的な自習を行ったり、テイクホームでの課題になるような自習補助教材として製作される。

c 印刷テキストとマルチメディア教材(CD-ROM)は、相互に緩やかな関連性をもたせ、メディアミックスとしての効果を発揮できるようにする。

これら3つの条件の中でも、とりわけcの条件を満たすために、つぎのような具体的なアイデアを盛り込むこととした。

(1) 印刷テキスト中の参考文献は、CD-ROMに全文を収録する。

(2) 執筆分担者が行ったフィールドワーク事例をマルチメディア作品として紹介する。

(3) デジタル動画による著者の肉声をCD-ROMに収録し、執筆者と学生との距離感をできるだけ小さくするように配慮する。

C マルチメディア教材の開発と実際

このような条件の下で、具体的なマルチメディア教材の開発が進められた。

1 技術的条件と制約

ところで、開発にあたっては、CD-ROMを媒体とするマルチメディア教材の製作に関しては、いくつか技術的な制約を考慮する必要があった。まず、CD-ROMのもつ容量のおよそ700メガバイトという制限であり、つぎに、データ読み込み速度がDVDなどと比べて

比較的低速であるという点である。

これに加え、マルチメディア媒体を立ち上げる学習者側のコンピュータの条件に対する考慮が必要であった。比較的学習者集団と動作環境を特定しやすい大学授業での利用ではなく、自宅における自習目的の補助教材を開発するという条件を前提にして、本研究では、まずウィンドウズ環境での動作を優先した。

つぎに、機種性能としては、現在の学部レベルの大学生が入学時に購入したウィンドウズ・パソコンを性能に関するおおよその最低限界として、それ当時の機種でも不自由なく操作や動作が可能な処理速度を前提として、コンテンツの製作を進めた。

2 コンテンツの特徴と構成

つぎに、制作するコンテンツとして、具体的につぎのような作品を想定し、実際に製作を行った。

まず、コンテンツは、大きく2つの部に分かれている。その第1部は、7人の研究者・フィールドワーカーが自らのフィールドワーク体験をマルチメディアで紹介、解説するフィールドワークの事例編である。

つづく第2部は、各研究者・フィールドワーカーが印刷テキストで紹介したり、引用したりした文献資料や論文などの全文をPDF形式のファイルであり、印刷教材での学習を補完する位置づけを与えられるものとなっている。

いうまでもなく、第1部のフィールドワークの事例編の7つの作品が、このCD-ROM教材の中心であり、Adobe社のDirectorをプラットフォームとして、映像・音声・テキストから構成されるマルチメディア・タイトルとして製作され、本教材の中心として位置づけられるものとなっている。

この7人のフィールドワークの事例は、7つのタイトルとして個別に製作されており、メインページから各章に分岐される構造となっている。学習者は、印刷テキストと併用しながら、印刷テキストの執筆者が実際に行っ

たフィールドワークでの研究事例をマルチメディア形式の作品を通して、より深く理解することができるように構成されている。

通常、マルチメディア形式のプログラムには、大きくみて3つの形態があると思われる。

1つは、データの検索を中心に行うためのデータベース型。1つは、明確なストーリーラインをもストーリーテリング型。1つは、視聴者の比較的自由的な選択的視聴をみとめるハイパーテキスト型である。今回開発したマルチメディア教材は、基本的には明確なストーリーラインをもつ2のタイプを採用した。ただ、そのストーリーラインに従いながらも、脇道にそれ自由に参考資料を閲覧できる3の要素を加えた。

ストーリーラインを明確にした理由は、ここに収録された7つの物語がそれぞれのフィールドワーカーが実際に経験したフィールドワークを時系列で再構成する形式をもっているからである。マルチメディアだからといって、すべてがすべてハイパーテキスト形式を採用する必要はないと考える。

最終的に完成したテキストは、『マルチメディアでフィールドワーク』（有斐閣、2002年3月）として出版された。出版にあたっては、株式会社有斐閣の全面的な支援を得た。印刷テキストの編集を担当したのは、編集第二部の松井智恵子氏である。また、CD-ROMは、「七人のフィールドワーカー～フィールドワークの方法・実践・成果」というタイトルを付し、印刷テキストの付録として添付され、提供された。CD-ROMのコンテンツ構成を以下に掲げる。

- ・ 山中速人「シュガーケーンフィールドの畔で～日系人二世のライフヒストリー調査」
- ・ 奥田道広「多文化都市を歩く～東京・新宿界隈のフィールドノート」
- ・ 園田茂人「アジアの日本企業を追う～中国社会で働く日本企業人へのインタビュー調査」

- ・ 大森康宏「ジブシー・マヌーシュを映画に撮る～フランスにおける移動民の映像民族学」
- ・ 山本真鳥「マラガとともに旅して～サモアの慣習的団体旅行の参与観察調査」
- ・ 若林良和「ソロモン諸島でカツオー本釣り漁船に乗る～船上労働のフィールド調査」
- ・ 佐藤郁哉「暴走族のエスノグラフィー～京都・逸脱文化の参与観察」

さらに、CD-ROMには、上記の研究者の参考文献が、5～6点ずつ全文、解題を付して収録された。解題の執筆は、中央大学大学院文学研究科博士後期課程の石田仁氏が担当した。

D おわりに

フィールドワーク体験をマルチメディアという表現技術を使って作品化する試みは、まだ始まったばかりであり、今後も試行錯誤が予想される。しかし、フィールドワーク体験の映像による表現としては、映像人類学や民族誌映画の経験がいくつかの貴重な示唆を与えてくれるはずである。これまでの経験と知見を基盤としながら、マルチメディアという新しい表現技術がフィールドワーク教育に与える変化に引き続き注目する必要は大きいように思われる。

関連文献

「フィールドワーク教育をめぐる動向と課題～技法教育へのマルチメディア利用に向けて～」『中央大学文学部紀要・社会学科』通巻188号、2001年5月、pp.113-160.

(<http://www.asahi-net.or.jp/~cr1h-ymnk/2002-5kiyo.html>)

に本研究に関連した詳細な文献一覧を掲載しています。



図版

山中速人「シュガーケーンフィールドの畔で～日系人二世のライフヒストリー調査」より

- 1 地図・図版の表示例
- 2 静止画の表示例
- 3 史料写真の表示例
- 4 動画の表示例
- 5 解説文と写真の表示例
- 6 参考資料の表示例

参考文献

- ・ 好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房、2000年
- ・ ジョン・ヴァン＝マーネン（森川渉・訳）『フィールドワークの物語 - エスノグラフィーの文章作法』現代書館、1999年
- ・ 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年
- ・ 関本照夫「フィールドワークの認識論」伊東幹治・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』ミネルヴァ書房、1988年
- ・ 渡部忠世『モンスーンアジアの村を歩く - 市民流フィールドワークのすすめ』家の光協会、2000年
- ・ 佐藤郁哉『フィールドワーク - 書を持って街へ出よう』新曜社、1992年
- ・ 箕浦康子『フィールドワークの技法と実際 - マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房 1999年
- ・ 中村尚司・広岡博之編著『フィールドワークの新技法』日本評論社、2000年
- ・ 庄野護『国際協力のフィールドワーク』南船北馬舎、1999年
- ・ 杉万俊夫『よみがえるコミュニティ～フィールドワーク人間科学』ミネルヴァ書房、2000年
- ・ 須藤健一編『フィールドワークを歩く - 文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院、1996年
- ・ 広岡博之「フィールド調査の新展開」中村尚司・広岡博之編著『フィールドワークの新技法』日本評論社、2000年
- ・ 山田勇『フィールドワーク最前線 見る・聞く・歩く - 京大探検部が誇る15人の精鋭たち』弘文堂、平成8年
- ・ J・G・クレイン、M・V・アグロシーノ（江口信清訳）『人類学フィールドワーク入門』昭和堂、1994年
- ・ 小宮敬子「看護婦が病院でフィールドワークすると

いうこと」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房、2000年

- ・ 拙論「マルチメディア教育事始め・メディア工房の経験と教訓・授業への導入・マルチメディア・レポートの制作指導1」『視聴覚教育』no.626、2000年12月号